
輝ける王国の物語

zen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝ける王国の物語

【Nコード】

N04870

【作者名】

zen

【あらすじ】

深い霧に包まれた「霧隠れの森」。

その森をひた走る一人の少年がいた――

サービス終了、移管先未定（涙）の
MMORPG「ブライトキングダム オンライン」の二次小説です。

2012/01/03（火）追記

移管先の運営会社が決まり、「ハンターキングダム」と名前を変えて、正式サービスが開始されました！

ブログで書いている作品を投稿することにしました。
ゲーム内の用語も多々出てきますが
プレイしていない方にも楽しんでいただけるよう
できるだけフォローしたいと思います><

連載小説を書くのは初めてなので
至らない点多々ありますが
楽しんでいただければ幸いです^^

走る少年とエルフの少女（１）

深い霧に包まれた「霧隠れの森」。

その森をひた走る一人の少年がいた。

時折、人間と同じ程の身長がある

二足歩行のネズミのモンスター「ラットマン」や

人間の子ども程の躯体に、背中に羽を生やした

妖精のようなモンスター「リトルグリンキー」を相手に
剣を振るっている。

木々が鬱蒼と茂った森を抜け、

視界が開けたところで少年は足を止めた。

「もう少しでエルドリンだ」

故郷ルーメンの村長ルメノスから

エルドリンの警備隊長シュティアンに

あるものを渡すよう頼まれていたのだった。

村を一步出れば、凶悪なモンスターが徘徊する

危険な世界が広がっている。

少年は、将来少しでも村の役に立てるようにと

幼少の頃から剣の修行を積んできた。

そのお陰で、見たことが無かったモンスターにも

何とか太刀打ちできている。

休憩を終え、さあ進もうかと立ち上がろうとしたとき

背後の茂みから、「何か」が飛び出してきた。

「なんだっ!？」

驚いて振り返ると、弓に矢をつがえた一人の少女とさっきまで自分が相手をしていたラットマンが立っていた。

「やっ!」

少女がつがえた矢を放すと矢はきらきらと光を放ちながら、ラットマンに突き刺さった。

どうやらその一撃が致命傷になったらしい。ラットマンは仰け反って地面に倒れ、動かなくなった。

「だ、大丈夫ですか？」

地面にへたり込んで息を切らしている少女に少年は声を掛けた。

振り返った少女の外見は、深緑色の瞳に亜麻色の髪が腰まで伸びており顔の両側からは、長く尖った耳が天に向かって伸びている。

（エルフだ）

村を歩いている冒険者の中に、時折エルフと思われる姿を見かけることはあったが、間近で見るのは初めてだ。

「うん、大丈夫。ありがとっ」

少女は飛び跳ねて立ち上がり、
体や服に着いていた泥を手で払った。

どうやら怪我はなさそうだ。

少年は胸を撫で下ろした。

モンスターと戦っていたということは、
このエルフの少女も冒険者だろうか？

どこから来たのだろう？

自分と同じように何か目的があるのだろうか？

様々な疑問が少年の頭に浮かび上がったとき。

「ちょうどよかった」

少女は少年に向って声を掛けた。

「もし、時間があつたらでいいんだけど。

手伝ってくれないかな？」

「えっ？」

いきなり手伝いを頼まれるとは思わなかった。

「いいですけど・・・何をすればいいんでしょう？」

「この坂を下った所にハーブがいっぱい生えてるんだよね。」

集めて来るように頼まれたんだけど、数が多いから人手があると
助かるの」

少女はにっこりと微笑んだ。

ルメノスからの依頼に時間の指定はなかった。

暗くなるまでにエルドリンに着けば問題ないだろう。

「いいですよ」

「わゝありがとう。助かるっ」

そう言うと少女は、自分が担いでいた鞆を下ろして
中から何種類かのハーブを取り出した。

「この黄緑の、セイジってやつと
薬草は葉と根と幹と全部ね」

見本に、と一つづつ渡してくれた。

「あつ、大事なことをうの忘れてた」

少女は胸の前で手を合わせ、少年に向き直った。

「あたし、ミトンっていうの。よろしくね」

「僕はパールっています。よろしく願いしますね」

走る少年とエルフの少女（２）

お互いに自己紹介を終えた後、二人はハーブ収集を開始した。
この場所にはハーブが群生しているようだ。

見本に手渡してもらったハーブと見比べながら、
地面から抜き取ったハーブを鞆に詰めていく。

しばらくして、エルフの少女・・・ミトンが声を掛けてきた。

「ねえ、パールくんはどこから来たの？」

「ルーメンって海岸沿いにある村です」

「あゝ港があつて、大きな船が止まつてるんだよね。

まだ行つたことないな」

ルーメンは規模としては小さいながらも港町として有名だ。
行つたことは無くても耳に挟んだことはあるだろう。

「ミトンさんは、どちらからいらつしやったんですか？」

「そんなに丁寧に言わなくていいよ」

ミトンがくすつと笑う。

「あたしと歳は変わらないと思うし」

「じゃあ何歳なんですか？」

「・・・ナイシヨ」

女性に歳を訊くのも失礼だと思つたが

エルフが長命であることは有名だ。

外見は自分と同年齢に見えても

本来はずっと年上なのだろう。

しかし、気を遣って話しては疲れてしまうのは確かだ。
遠慮せずに喋ることにしよう、とパールは思った。

「あとどれぐらいで終わり？」

「んゝセイジがあと十本だね」

ミトンは立ち上がって、背筋を伸ばした。

「ずっとしゃがんでると疲れるねゝ。

パールくんも休憩したら？」

そうだな・・・と立ち上がろうとした瞬間。

「パールくんっ、うしろ！」

ミトンが驚いた表情でパールの後ろを指した。

振り返るとそこには、今まで何度も倒したラットマンと

同じ様相ではあるが何倍も屈強そうなモンスターが立っていた。

「ガアッ！」

モンスターは声を上げ、手にした斧を
パールに向って振り下ろした。

「わっ」

完全な不意打ちを食らったパールは
体勢を崩して、地面に尻餅をついた。

「早く立って！」

ミトンはすでに弓矢を構えて
迎撃体勢に入っている。

「いくよっ」

打ち放った矢はモンスター目掛けて軌跡を描き、
胸の辺りに深々と突き刺さった。

致命傷にはなっていないが、相手の動きを止めたようだ。

「今のうちに！」

パールは慌てて立ち上がり、剣と盾を構えた。

動きが止まっていたのは僅か数秒で、

モンスターはミトン目掛けて走り出してきた。
攻撃を仕掛けたミトンに照準を定めたらしい。

ミトンは次の矢を構えている。

いくら冒険者といっても華奢なエルフだ。

攻撃を受けてしまつては致命傷になる可能性が高い。

（この子を守らなきゃ！）

パールは焦りながらも、ルーメンで自分にファイターとしての
スキルを教えれくれた、スキルマスター・ルビのアドバイスを思い
出した。

（仲間とパーティーを組んでいるときは、まず敵にキックを浴びせて、

照準を自分に向けさせること！）

すでにミトンに向って走り出しているモンスターに対してパールはキックを放った。

キックに気をとられたモンスターは照準をパールに変更したようだ。

自分に向って走ってくるモンスターを見据えながら、次の手を思い出す。

（少しでもダメージを抑えたいなら、当身を食らわせて敵の動きを止める！）

パールは剣を振るう前に、思い切り踏み込んで右肩から体当たりを食らわせた。

不意打ちを食らったモンスターは、よろけて仰け反った。

（最後は集中して、素早く剣を振るうんだ！）

構えた剣を左、右、左と薙ぎ払う。

ファイターが最初に習得する「トリプルヒット」という技だ。

敵の胴体に三太刀、切り刻まれた。

仰け反っていた敵が動き出したかと思った瞬間、また止まった。モンスターの背中側から、ミトンが応戦してくれているらしい。

パール自身も敵の攻撃を食らいながら

当身と技を何度も繰り返す。

敵から受けた打ち身と切り傷で頭が朦朧としてきた頃。

「やあっ！」

最後に放ったトリプルヒットが予想以上の効果を与えたいらしい。
敵は大きく仰け反って、どう、と地面に倒れこんだ。

「やったあ！」

ミトンは大きく飛び跳ねて、パールの元に駆け寄った。

「あいつ、強いんだよね。あたしも何度も追い掛け回されたけど倒したことがなかったんだよ。パールくん、すごいっ！」

ミトンが無傷であることを確認し、ほっとした途端、
パールは全身からの力が抜けて地面に座り込んでしまった。

「よかった・・・」

「パールくん、回復ストーンって持つてる？」

あたしポジション切らしてるから、自分で回復してもらわないと・・・」

ようやく、自分が思った以上にダメージを受けていることに気づいた。

攻撃するのに必死で、攻撃をかわしたり、盾で受けたりする余裕がほとんど無かったのだ。

ミトンが焦っている傍らで、パールはすっかり放心状態になってい

た。

しばらく休憩していれば、動けるようになるだろうが
今のような敵がいつ襲ってくるとも限らない。

早く移動しなくては・・・とパールは考え始めた。

不意に、暖かな光がパールの体を包み込んだ。

同時に傷はふさがり、打ち身で青く腫れ上がっていた部分は
徐々に元の肌の色に戻っていった。

「おゝい。そこの少年。大丈夫？」

声がした方を向くと、聖職者と思われる衣装を身に着けた女性と
長いローブを身に纏った男性・・・ミトンと同じように長い耳をして
いることからエルフと思われる・・・が立っていた。

走る少年とエルフの少女(3)

「はい。大丈夫です」

パールは立ち上がって答えた。

「今は・・・？」

「こっちのお姉さんがヒールをかけてくれたのさ」

エルフの男性が気さくに答えた。

「ごめんね。もっと早く助けてあげたらよかったんだけど。

今のヒールで勘弁して。ね？」

謝るかのように顔の前で手を合わせ、
パールに向ってウィンクした。

「勘弁も何も・・・回復してくださって、ありがとうございます」

パールは深々と頭を下げた。

「いえいえ。どういたしまして」

「お姉さんは辻ヒールがシュミだからね。お礼なんていらなくて」

男性が横で茶々を入れる。

「さつきからお姉さんってねえ。あなたの方が遥かに年上でしょう
！」

女性がメイスで男性を殴る振りをした。

「あゝおっかない。少年も女には気をつけるんだぞ」

急に話を振られて、パールは困ってしまった。

やはり女性に歳の話をするのはよくないらしい。

それはよく分かったのだが。

「少年、さっきの戦いっぷりは立派だったぞ。

最初は手助けしようと思ったんだがそっちのお嬢ちゃんとの連携も上手くいっていたからな。見守ることにしたんだ」

エルフの男性はミトンの方を見た。

こちらにも急に話を振られて動揺したらしい。

「パールくんがすぐにタゲ取ってくれたんで助かりました。

あたしも打ち込みやすくなりましたし。

あつ、あたしはミトンっていいます。こちらはパールくん」

男性に受け答えしつつ、ミトンが自分を含めて紹介してくれた。

「俺はクラウっていうんだ。よろしくな。こっちのお姉さんは」

女性がじろりとクラウを睨む。

「っと、こちらのお嬢さんはミリアだ。俺たちはエルドリンから来てただけだね」

「依頼も終わったことだし、街に戻るところだったのよ。そこであなたちが

戦っているのを見かけて走ってきたの。ラットマンファイターは

結構強いからね」

二人とも心配して駆け付けてくれたらしい。

「これからどこに行く予定なのかしら？もしエルドリンに行くのだ
つたら

私たちと一緒に行かない？」

ミリアが尋ねてくれた。

「僕はエルドリンに行く予定です。ミトンは？」

初めてこの子の名前を口にしたな、とパールは思った。

「あたし？あたしはウルガまで戻るよ」

「ウルガ！？」

ミリアとクラウが同時に声を上げた。

走る少年とエルフの少女（4）

「ウルガって・・・あのウルガかい？」

クラウが半ば呆然として、ミトンに尋ねた。

「ウルガって1つしかないでしょうから、そのウルガだと思います」

クラウの質問に、ミトンは一瞬きよとした。

そして、答えを続ける。

なぜそんなに驚かれるのか、腑に落ちないようだ。

「そんな遠い所から、1人で来たの？」

今度はミリアが尋ねる。

「エルドリンまでは、他の冒険者の人たちに連れてきてもらったんです。

何度が戦闘もありましたが、ほとんど他の人たちがやつつけてくれてたんで・・・」

ウルガはエルドリンから「崩壊した監獄」と呼ばれる地域を抜け、さらに谷を渡った所にある山間の村落だ。

以前は戦争時の基地として使用されていたらしい。

とても強いモンスターが徘徊していると聞く。

まさかそんな場所から来ていたとは。

「それで、どうやって帰るつもりだったんだ？」

「ここでハーブを摘み終わったら、帰還書を使って帰るつもりだっ

ただけど。

すっかりおじいちゃんからもらってくるの忘れちゃって」

ミトンはぺろつと舌を出した。

一同、啞然。

「うーん。俺達もウルガまで送っていけるほど強くねえからな」

「そうねえ。帰還書も持ってないから譲ってあげられないしね」

クラウとミリアも困っているようだ。

「とりあえず、エルドリンまで戻らない？」

帰還書が露店売りで出されてるかもしれないし」

「ウルガの帰還書なんて貴重品だろ？そんなにほいほい売ってる訳な・・・」

クラウの発言は途中で遮られた。

足を押さえて飛び跳ねている様子から、

ミリアが思いつきり脛を蹴り上げたらしい。

「何するんだ！この凶暴クレが！」

「あーら。ケガしたらヒールで治してあげるんだから、問題ないでしょう？」

女性だけではなくクレリックも怒らせると厄介なのかもしれない。

パールは新しい知識を得た気分になった。

「パールくん、セイジあと10本残ってるんだけど」

「そうだね。10本集めるまでにはあっちの追いかけても終わってるだろうし」

クラウとミリアのじゃれ合いを横目で見ながら
2人はハーブ集めを再開した。

城塞都市エルドリン（1）

4人はエルドリンを目指して霧隠れの森を進んだ。

いつまたモンスターに襲われるかとパールは緊張していたが、パールやミトンが手を出す暇もなく

クラウとミリアは次々にモンスターを倒していった。

特にクラウの魔法の威力は凄まじく、数体のモンスターを同時に倒すこともあった。

ミリアはクラウを回復しつつ、

メイスを手にモンスターを殴り倒していった。

「すごい！」

ミトンはクラウの魔法の威力に見惚れ、拍手を送っていた。

パールも魔法が放たれるのを傍で見るのは初めてだった。

クラウが杖を構え、呪文らしき言葉を口にすると

光の矢や氷の弾が手から生まれ、モンスター目掛けて放たれる。次の瞬間には、ほとんどのモンスターが倒れていた。

「魔法って、すごいんですね！」

パールも感嘆の声を漏らす。

「これぐらい、どうってことないって」

クラウは謙遜しているが、褒められてまんざらでもないようだ。

「僕、メイジさんが魔法使っているところを初めて見ました」

「そうなのか？」

「メイジさんに限らず、ですけど。」

他の冒険者の人たちと一緒に戦うのって初めてだから」

「そうか！じゃあ次はもつとすごいを見せてやるぞ！」

「あのねえ、この辺りのモンスターなんて

あなたにとつて弱くなっちゃってるんだから。

もうちよつと手加減しなさいよ」

ミリアが注意した。

「いいじゃないか、少しくらい」

「何も考えずに突っ込んだじゃって。」

少しはサポートする方のことも考えてよね！」

そう言われてクラウは少し不機嫌になったようだ。

しかし、ミリアはサポートする側の負担について苦言を呈しているのではなく、

単純に、クラウの体を心配しているようだった。

クラウは「メイジは紙だから」と自分の防御力の低さを皮肉っており、

先程の戦闘でもいくらかの傷を負っていた。

自分より弱い相手でも、複数に囲まれては無傷では済まないようだ。ミリアのサポートがなければ早々に倒れていたかもしれない。

しばらくして、思い直したようにクラウが言った。

「はいはい。クレリック様のご忠告は有難く頂戴しておきますですよ」

「もー、ホントに分かってるのかなあ」

二人のやり取りを聞きながら歩いていると、突然ミトンが声を上げた。

「あつ、エルドリンの門、はっけ〜ん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487o/>

輝ける王国の物語

2012年1月5日20時53分発行